

## 会津方言の疑問文の音声特徴\*

ギンズバーグ ジェイソン<sup>†</sup>・ウィルソン イアン<sup>‡</sup>・金子恵美子<sup>§</sup>・小笠原奈保美<sup>\*\*</sup>

### 1. はじめに

本研究は福島県会津地方の方言で使われている疑問文を対象とし、その特徴を明らかにすることを目的としている。少子化や過疎化などの影響により会津方言の存続は危ぶまれている。その上、会津方言の疑問文の言語学的解析は、坂本 et al. (2010) などを除き、ほとんど行われたことがない。本稿では、会津方言の音声データの収集、分析の結果から、会津方言と標準日本語（東京方言）の疑問文のイントネーションとピッチピーク（文章のなかでピッチが最も高い部分）が異なることを示したい。

他の方言の例に違わず、会津地方でも、若い世代が使用する会津方言の標準語化が進んでいる。客観的調査はしていないものの、その根拠として、1) 年配の被験者が、孫は会津弁を話せないと証言していた、2) 若い世代から対象となるデータを試験的に収集してみたところ、上の世代の会津弁のデータと明らかに異なっていた、といったことが挙げられる。そこで本研究では主に年配の会津方言話者(60代~90代)を対象とした。

データ収集は以下のように行われた。標準語、もしくは会津方言の単語を使った文章が書いてある紙を参加者に見せ、その文章を会津方言ならどのように言うかを尋ね、参加者の返答を録音した。PRAAT という音声解析のフリーソフトウェアで、収集した音声データから対象となる疑問文を抽出し、PRAAT で表示されるピッチトラックを、標準日本語の同じような文章のピッチトラックと比較することで、会津弁の特徴を抽出した。

現時点で 47 名(平均年齢74歳)のデータを収集したが、本論文では、その一部のみを扱う。また、会津地方で使われている方言は地域によって異なる。おそらく、会津地方が広大で、山や川などの地形的理由で隔離されている部落や町が多いためである

---

\* 次の方に感謝を表す：五十嵐近子、本名幸平、土井輝正、阿部友亮、岡田純、橋本有理香、金田淳、そして会津弁のデータ収集に参加して頂いた会津方部の方々。

<sup>†</sup> Jason Ginsburg (大阪教育大学) jginsbur@gmail.com

<sup>‡</sup> Ian Wilson (会津大学) wilson@u-aizu.ac.jp

<sup>§</sup> かねこ えみこ (会津大学) kaneko@u-aizu.ac.jp

<sup>\*\*</sup> おがさわら なおみ (会津大学) naomi-o@u-aizu.ac.jp

が、本稿では、福島県会津若松市、猪苗代町、昭和村で話されている会津弁に限って議論する。

本論文の構成は以下の通りである。まず、第2節では、標準日本語と会津方言の基本的なイントネーションとピッチの違いを紹介する。そして第3節で会津方言における子音の有声化による疑問文への影響について説明する。第4節で本論文の内容をまとめる。

## 2. 標準日本語と会津方言のイントネーションとピッチピークの違い

標準日本語と会津方言の疑問詞疑問文はイントネーションとピッチにおいて、基本的な違いがあるように思われる。標準日本語では基本的に上昇調になり（木部 2010）、また、ピッチピークは疑問詞に置かれる（Ishihara 2003）。しかし、会津方言で収集されたデータを見ると、基本的にピッチピークは疑問詞にはなく、疑問文は下降調になる。

標準日本語の疑問詞疑問文（1a）のピッチトラック（図1）によると、疑問文は上昇調になることがわかる。また、疑問詞の「なに」でもっともピッチが上がり、疑問詞にピッチピークが置かれている。それに対し、（1b）は会津若松市在住95歳の女性から収集された（1a）と同じような構造の文章であるが、（1b）では疑問文は下降調になり、疑問詞の「なに」で多少上昇傾向は観察されるものの、ここで一番高くなるのではなく、ピークは「ながし」に置かれている（図2）。

標準日本語

会津方言

- (1) (a) 直也がなにを飲み屋で飲んだの？ (b) 爺様ながしでなに飲んだらべ？

(Ishihara 2003:52)

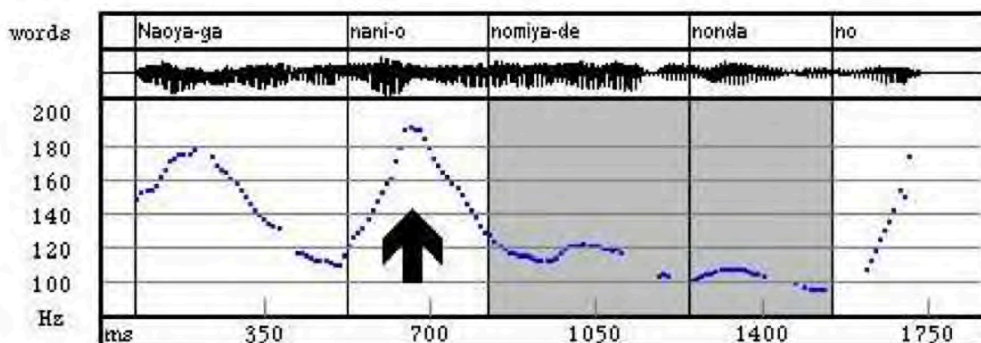


図1 :Ishihara (2003:53)より標準日本語 (1a) のピッチトラック

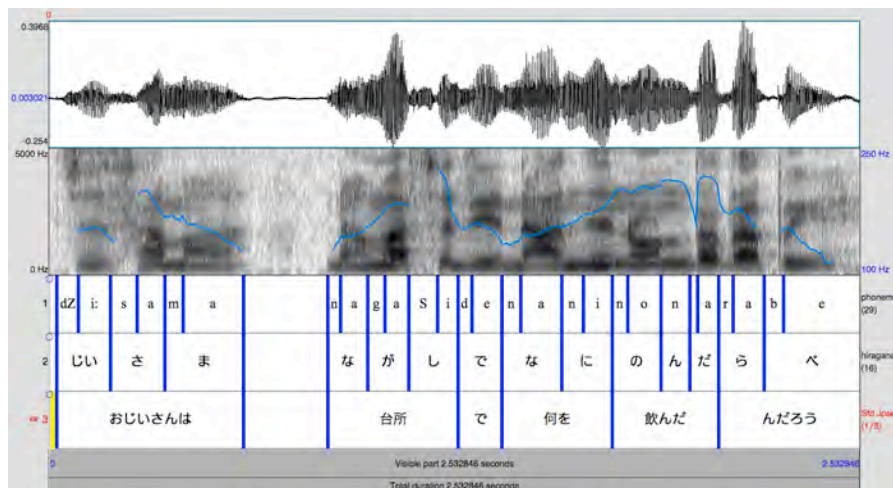


図 2: 会津弁 (会津若松市) (1b) のピッチトラック

(2a) は肯定文、(2b) は (2a) と似た構造を持つ疑問詞疑問文で、同じ話者 (昭和村在住、女性、78歳) から収集された。どちらも下降調になる (図3、図4)。また、(2b) のピッチピークは、疑問詞の「なに」に置かれていないことが分かる (図4)。

肯定文 (会津方言)

疑問文 (会津方言)

- (2) (a) じいさまな、なにがながしで くってたぞ。 (b) じいさま、ながしでなにをくってたら べ？

標準日本語：お爺さんが何かを台所で食べたよ。

標準日本語：お爺さんは何を台所で食べて たんだらう？

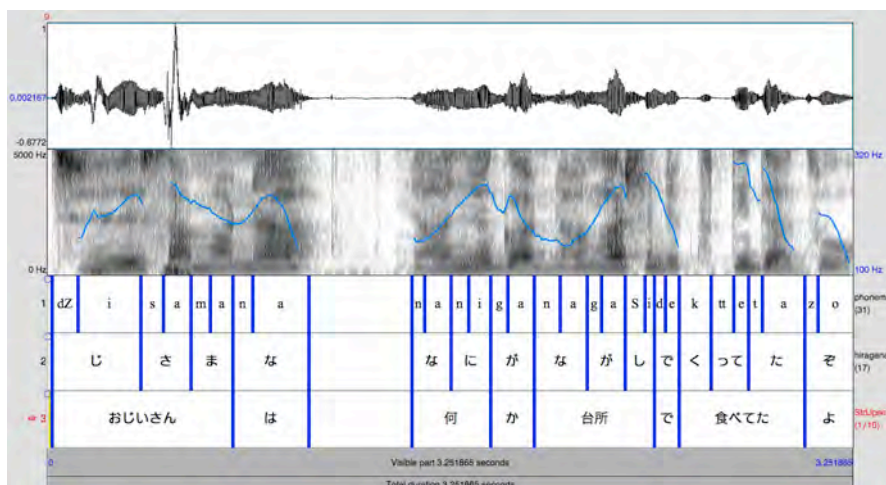


図 3: (2a) (昭和村) のピッチトラック

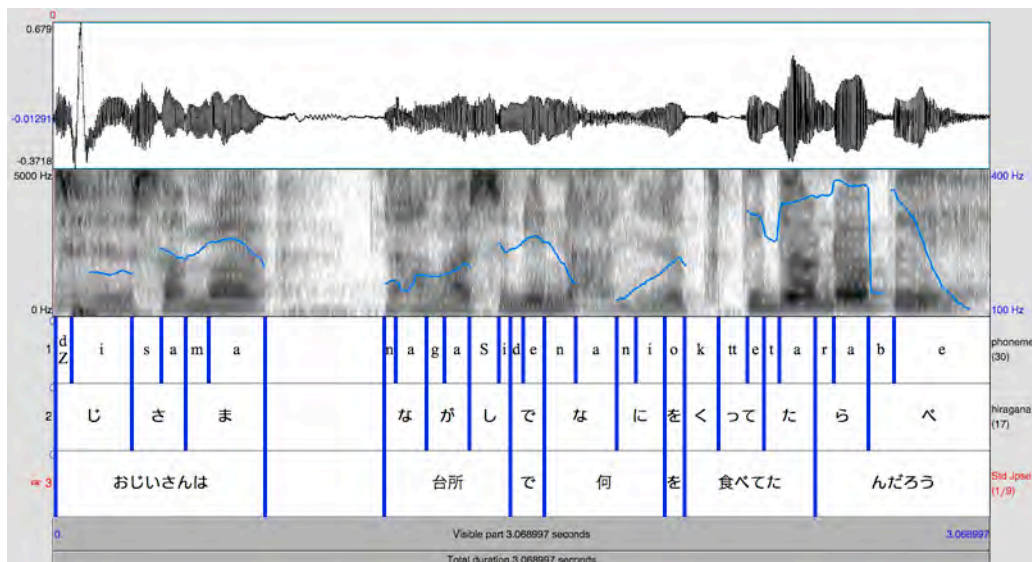


図4: (2b) (昭和村) のピッチトラック

(3a, b) は埋め込み疑問文の例である。標準日本語の (3a) ではピッチピークは疑問詞に置かれ、文は上昇調になっている (図5)。58歳の会津若松市在住の女性から収集された文 (3b) ではピッチピークは疑問詞ではなくて、「みずや」に置かれている。そして、文末も下降調になる (図6)。

標準日本語

会津方言

- (3) (a)直也は[マリがなにを飲み屋で飲んだと] (b)あねさは[じっちがなに、みずやで飲  
今でも思っているの? (Ishihara んだと]今思ってたべ?  
2003:53-54)

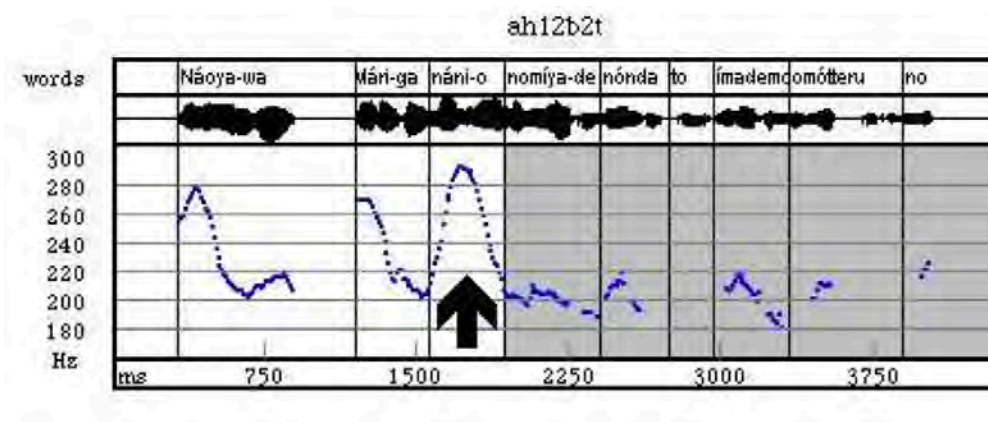


図5: Ishihara (2003:54)より標準日本語 (3a) のピッチトラック



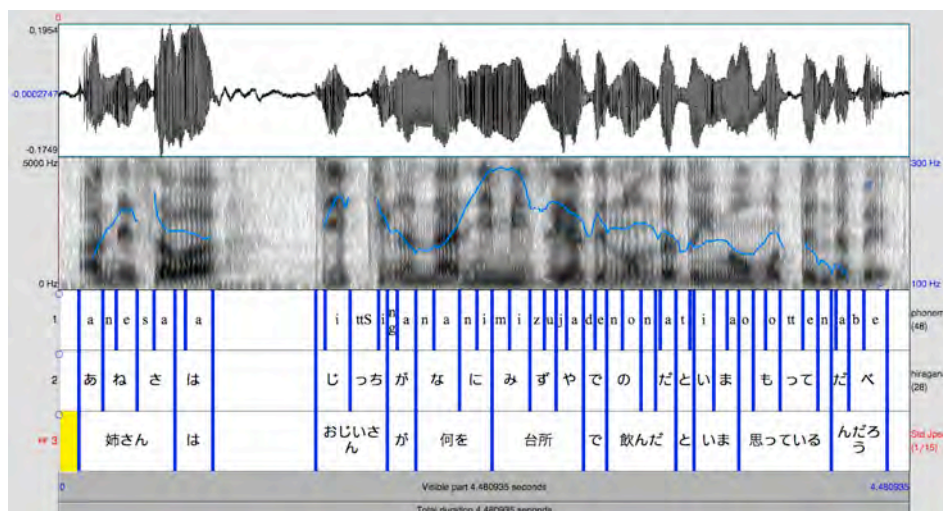


図 6:会津弁（会津若松市）（3b）のピッチトラック

多重疑問詞疑問文でも同じ傾向が見られる。標準日本語（4a）では両方の疑問詞にピッチピークが置かれ、文は上昇調になっている（図7）。一方、94歳の会津方言話者から収集された文（4b）では、最初の疑問詞（「誰」）は上昇傾向を示すのみ、2つ目の疑問詞（「なに」）にもピッチピークはなく、加えて、疑問を表す終助詞は存在しないにも関わらず、文は下降調になる（図8）。

標準日本語

会津方言

- (4) (a) 誰があの夜なにを飲みやで飲んだの？ (b) 誰があの晩、なにをそこらへんでく  
 (Ishihara 2003:65) った？

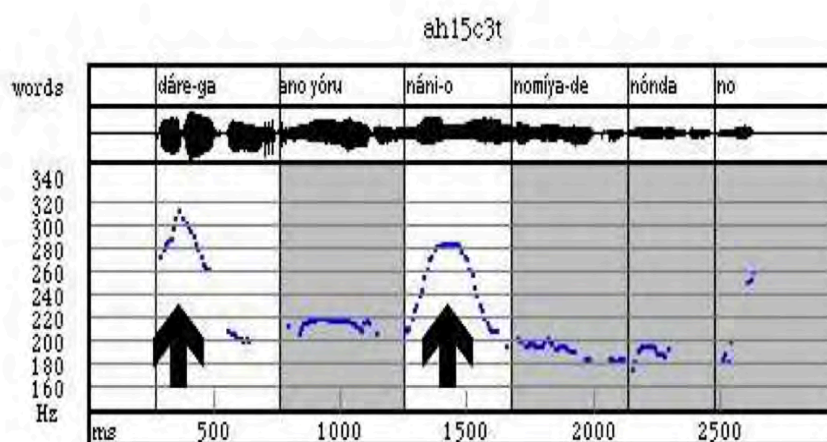


図 7:Ishihara (2003:53)より標準日本語（4a）のピッチトラック

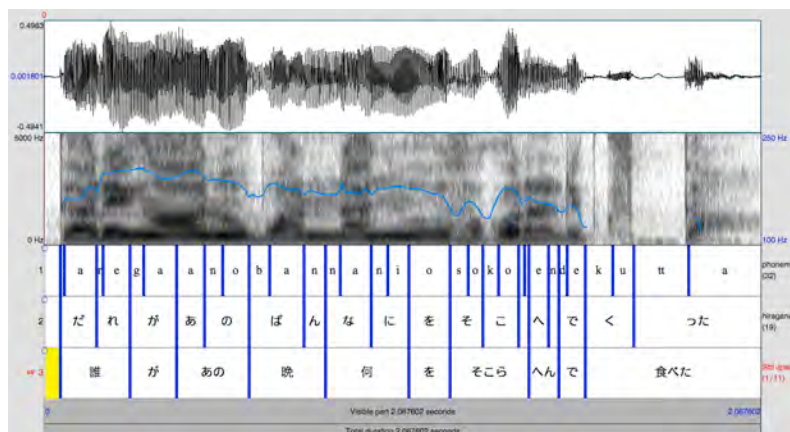


図 8:会津弁（猪苗代）（4b）のピッチトラック

(5) は昭和村出身の 73 歳の男性から収集された多重疑問詞疑問文であるが、この文章で使用されている 2 つの疑問詞（「誰」と「なに」）のどちらにも、標準語で見られるような、明らかに際立ったピッチピークは存在せず、文も下降調になる（図 9）。

多重疑問詞疑問文

(5) ゆべ、だれが、でどころで、なにたべたらべ？

標準日本語：あの晩誰が台所で何を食べたんだろう？

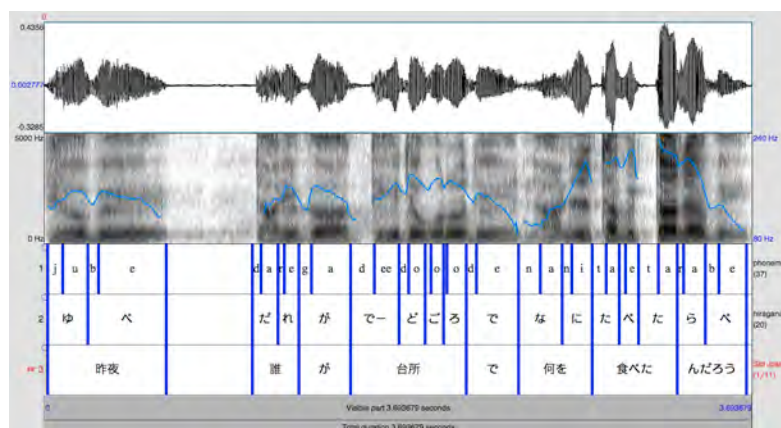


図 9: (5) (昭和村) のピッチトラック

なお、本研究で収集した会津弁の疑問文の文末に、「～べ」が頻繁に使われた。この終助詞は推量、意志を表す語尾で、標準語では「～ろう」「～よう」にあたり (p. 317, 安藤 2011)、文末のピッチが下降するのは標準日本語と同様である。しかし、「か」や「の」といった、疑問の終助詞で終わる標準語を被験者が見て、それを会津弁にする際、「～べ」を多用したことは、これらの会津弁、標準語の終助詞の意味するところ

が完全に一致せず、微妙に異なっている可能性を示す。標準語の文章を見て、それを会津弁で言い直すという特殊な環境であったことも、終助詞の選択に何等かの影響を与えたかもしれない。会津方言の「べ」の意味範囲は、更に詳しく調査する必要があるだろう。

### 3. 会津方言の有声化による疑問文への影響

会津方言においては、イントネーションと有声化の興味深い相互作用が見られる。会津方言では、母音間で無声子音が有声になる場合があり、(例: 頭[atama]>[adama])。この現象によって標準日本語の「なにか」は疑問詞の「なにが」と同じように発音されることがある。

(6 a, b) は94歳の猪苗代出身会津方言話者の疑問詞疑問文(6 a)と肯否疑問文(6 b)である。

- |                 |             |
|-----------------|-------------|
| 疑問詞疑問文          | 肯否疑問文       |
| (6) (a) なにがみっか? | (b) なにがみっか? |

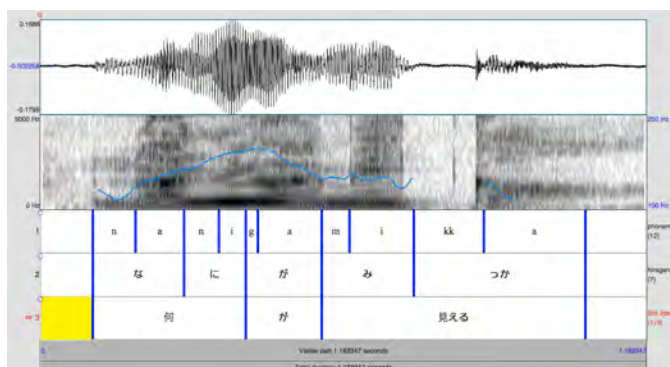


図 10: (6 a) (猪苗代) のピッチトラック

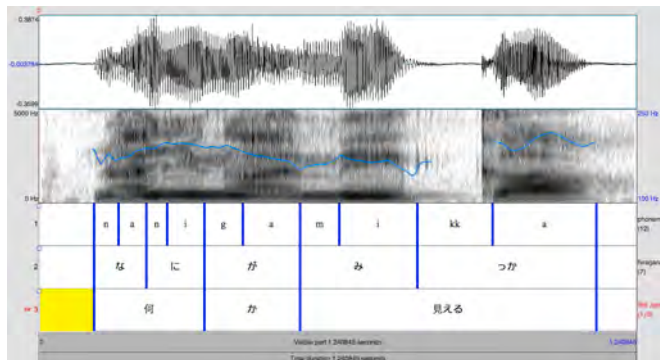


図 11: (6 b) (猪苗代) のピッチトラック

標準日本語の「なにか」は、会津方言では「か」の有声化によりで「なにが」と

発音され、その結果、疑問詞疑問文と肯否疑問文の個々の分節音は表層的には同一のものとなる（いわゆる中和）。しかし、疑問詞疑問文（6a）と肯否疑問文（6b）のピッチは明らかに異なっている。（6a）は下降調になり（図10）、肯否疑問文（6b）は上昇調になる（図11）ことで、この2つの区別をしていると考えられる。

#### 4. まとめ

以上、会津方言の疑問文の音声データを分析することで、会津方言の疑問文の独特な性質が明らかになり、標準日本語との違いを探ることができた。特に疑問文において下降調になり、また疑問詞にピッチピークは見られない傾向があることがわかった。

本研究の結果は、表1のようにまとめることができる。言うまでもなく、これらは本研究で分析された会津弁において観察された傾向であって、どの程度一般化できるのか、またこれらが無標ピッチなのか、無標ピッチである場合、どのような要因が、無標ピッチから逸脱した有標ピッチを生じさせるのか等、更に詳しい分析が必要と言えるだろう。また、冒頭で述べた通り、会津地方でも地域によって話されている会津方言に微妙な差異があり、方言によつての疑問文の作り方が違う可能性も否定できない。今後の調査で、明らかにしていきたい。

	疑問詞にピッチピークあり	上昇・下降
標準日本語	通常、有り	通常、上昇調
会津方言	通常、無し	通常、下降調

表1：標準日本語の疑問文と会津方言の疑問文の特徴の比較

#### 参考文献

Ishihara, Shinichiro. 2003. *Intonation and interface conditions*. Massachusetts Institute of Technology Dissertation.

安藤潔（2011）：『ふるさと会津・方言摘草』文芸社

木部暢子（2010）：イントネーションの地域差—疑問文のイントネーション—. 小林隆、篠崎晃一（編），『方言の発見 知らざる地域差をしる』、pp.1-20、ひつじ書房。

坂本通治、金子恵美子、ウィルソン・イアン、山内和昭（2010）：会津地方における各方言のフォルマント分析、「日本方言研究会第90回研究発表会発表原稿集」、pp. 9-16。